

テーマ 便通障害(下痢と便秘) 平成28年度漢方医学講座・臨床講座

便通障害(下痢と便秘)

東海大学医学部専門診療学系漢方医学教授

新井 信

(平成29年3月12日収録)

本日は下痢と便秘について、実際にどういう処方を使うかを中心にお話いたします。本論に入る前に、まず「漢方上達のコツ」に触れたいと思います。

はじめに

■漢方上達のコツ(表1)

保険適応のある漢方処方、エキス製剤だけでも147処方、紫雲膏を入れると148処方あります。漢方上達のコツは、はじめから多くの処方を使い分けようとせず、良く効く処方を使い込むことです。処方を鑑別していくことはもちろん重要ですが、使用する処方は少しずつ増やすのが良いと思います。経験を重ねるうちに、よく使う処方は集約されてきます。最初から、いろいろと手を出すよりも、少ない処方を使い込んだ方が絶対に上手になると私は思っています。

表1 漢方上達のコツ

1. 多くの処方を使い分けるのではなく、 良く効く処方を使い込む
2. 処方根拠を明確にする
3. 可能な限り1剤で対処する

腸症の分類です。機能性ですから漢方の良い適応になってくるわけです。

このように消化器領域は、消化器癌のように、器質的で医師側からのアプローチをすべき問題と、同時に機能性疾患が非常に多い領域だと言えるでしょう。他の領域はもちろんのこと、とりわけ消化器領域は西洋医学と漢方の両方の目で見ることが重要だということです。

下痢と漢方

漢方で下痢を上手く治療するには、下痢を「陰の下痢」と「陽の下痢」に分けて考えると良いと思います。

■陰の下痢

陰の下痢とは、新陳代謝が落ちて、熱状を伴わず、さらっとした水様便を頻回に排泄するような下痢を指します。慢性的に経過する非炎症性の下痢で、腸管の機能低下が原因であり、漢方の良い適応と考えられます。漢方では機能低下を冷え、すなわち寒と捉え、また消化管は(表に対して)の裏と捉えますので、陰の下痢は「裏寒証」ということになります。治療はもちろん裏を温めることを原則に考えますが、水様性下痢などは水毒ですので、それらを考慮して、人參、乾姜、附子、朮などの生薬が配剤された処方を用いて対処します。当然、同時にお腹を温める腹巻き、ズボン下を着用し、温かいものを食べるなどの生活指導も実際の臨床では非常に有用です。

■慢性水様性下痢

〈第一選択薬：人參湯と真武湯〉

陰の下痢に対する代表的処方は、人參湯と真武湯です。この二剤の使い

分けは、一言で言うと、人参湯は人参剤、真武湯は附子剤だということです。

[真武湯]

附子剤である真武湯は非常に新陳代謝が低下して、お腹が冷えている、下腹部が冷たくなっているというような寒の病態に使用されます。腹部は軟弱で脈が弱く、冷え症で血色が悪い。排便後にだるい。新陳代謝が落ちている。鶏鳴瀉あるいは五更瀉、すなわち夜明け頃の腹鳴と下痢、というのが真武湯を用いる場合の典型的な目標です。

体温計メーカーであるテルモのホームページに、ヒトの体温は夜明け前2時間ぐらいがボトムになると書いてあります。漢方でいえば陰が支配する時期です。夜明け前の最も身体が冷える時間帯にゴロゴロお腹が鳴って下痢をすることが真武湯を用いる際の大きな特徴だと昔から言われています。もちろん、それに伴って下腹部が冷たかったり、手足が冷えたりということもあります。

[人参湯]

一方、人参湯は、簡単にいうと、胃腸が弱く六君子湯の適応するような人が下痢するときに使用します。人参湯には、乾姜など温める生薬がたくさん入っていますが、基本的に人参湯は上部消化管症状を伴う人に多用します。食欲がなく、胃もたれするといったfunctional dyspepsia(FD)があり、冷え、機能低下が強い状態です。消化管の機能低下による症状として、口の中に薄い唾液が多く溜まる状態を認めることもあります。これを漢方では喜唾といいます。

冷えて薄くて大量で水っぽいもの、これは冷えの現れと認識します。例えば身体が冷えたとき、薄い尿が大量に出ることがありますが、これは冷えの現れです。逆に39度、40度の熱が出たときは、濃い尿がほんの少ししか出ない。これは身体の中に熱があることの現れと考えます。花粉症も薄い鼻水がザーっと出るのは、これは冷えです。だから小青竜湯のような、乾姜などの入った薬を使うわけです。一方、副鼻腔炎のような濃い鼻汁が

表3 第二選択薬

第二選択薬	
附子理中湯(人參湯+附子)	悪寒/手足厥冷
茯苓四逆湯(人參湯+真武湯)	激しい下痢/脈微弱/顔色不良/手足厥冷
その他の処方	
啓脾湯	真武湯、人參湯が無効な場合
桂枝人參湯	人參湯証で悪寒、発熱がある
半夏瀉心湯	心下痞硬/腹中雷鳴
甘草瀉心湯	半夏瀉心湯の適応で下痢の回数が多い
桂枝加芍薬湯	過敏性腸症候群の第一選択薬/腹痛/下痢/裏急重後
胃風湯	虚弱体質の慢性下痢/直腸炎/潰瘍性大腸炎

ドロっとしているようなものは、熱がこもった状態として、葛根湯や葛根湯加川芎辛夷のようなものを使っていくということになります。

喜唾というのは、唾液が喜んでいてではなくて、喜は「しばしば」という意味です。薄い唾液が、繰り返しこみ上がってくる状態です。通常、起きていれば重力で喉の奥に唾液は下がってしまうのですが、夜中に涎を垂らして寝ているという状況は喜唾かもしれません。人參湯の適応かなと思ったら、夜中に涎は垂れていませんかと聞いてみるのもいいかもしれません。

このようなことを参考にして、真武湯と人參湯の二つを使い分けますが、私自身の臨床的な感覚でいえば、慢性の水様下痢に対しての使用頻度は、真武湯が2に対して、人參湯が1ぐらいという印象です。

〈第二選択薬〉(表3)

第二選択以降は様々です。

人參湯より冷えが強ければ附子理中湯。どうしても止まらないような下